

小田英孝さん

1928(昭和3)年2月14日生まれ
当時の本籍地 北海道
陸軍 戦車兵
戦車第11連隊 第4中隊(伊藤隊)

占守島



- 1943(昭和18)年12月1日 陸軍少年戦車兵学校に入校(第5期)
- 1945(昭和20)年1月6日 戦車兵学校卒業 同2月11日 占守島の戦車第11連隊に到着
- 1945(昭和20)年8月16日 終戦を知る 同日よりロパトカ砲台からの砲撃が始まる
- 1945(昭和20)年8月18日 ソ連軍が占守島に侵攻 同日午前2時ごろ 四嶺山へ偵察に行く
・四嶺山からくだり目だけけどその一番高いところからこう下るとこまでいったら、敵が上陸した竹田浜のほうがかすかに見えた。ぽこーんぽこんと砲撃の煙があがってる。ああ戦闘始まってんだなあと思いながら、前方銃手だったので機関銃の眼鏡で見ていた。
- 1945(昭和20)年8月18日午前5時半ごろ 戦車第11連隊が戦闘のため前進
・敵はもうどんどんどんどん上がってくる。高射砲を水平にしてドーンと撃つと敵の上でバーンと破裂する。歩いている敵の兵隊がそれこそ10人か20人くらいポーンと吹っ飛んだ。
・どんどん撃っているうちに、高射砲をやっつけるために、こんどは前のほうから敵がもこもこやってきた。中隊からどンドンどンドンもう撃ても撃てもくるわけだ。それこそ乱射乱撃で撃つわ撃つわ。そうしてどンドン撃つとワツと敵が倒れてひとつも見えなくなった。いや全部やっつけたのかと思ったら、またもこつとおきあがって、また走らないで横着に歩いてくる。日本の兵隊だったら這ったり腰を曲げたりするんだけど、堂々と手をふって進んでくる。そうしたらいい目標だからまた撃つ、また来るで、いやもうそれこそ戦車の中は煙と薬莖でいっぱいだった。そうやってしばらく撃っていたけれどこんどは弾なくなったっていうわけだ。徹甲弾はあるけども榴弾がない。徹甲弾は歩兵を撃ったって破裂しないんだ。鉄に当たると弾がぐんぐんと止まるから破裂するんだけど、土の中だとすぽーっとはいっていき。破裂徹甲弾は20発ぐらいしか積んでいなくて、あとは全部榴弾ばかりだったんだけど、100発ぐらいの榴弾を全部撃っちゃった。
・その後車長が負傷したため旅団司令部まで後退した。
・司令部の前には敵兵があちこちに死んでいた。その中の一人が寝返りをうってひっくりかえった。そばまで行くと寝ていた敵がぎゅっと銃をもって立ちあがりかけたので、軍刀でだつと斬った。手ごたえで頭から鼻まで切れたと思う。ガバツ！とカポチャを鈍でぱつと切ったみたい音がした。それから刀をかついで、「あれが手あげてくれりゃあ斬らなくてもよかったのになあ」と思いながら帰って来た。あれからしばらくはなかなか思い出さないようにしてたんだけど。
・18日夕方、長島大尉以下の軍使を四嶺山まで戦車に乗せて連れて行った。
- 1945(昭和20)年8月23日 武装解除される 同25日ごろ戦場の遺体整理に行く
・ロシア兵が家族の写真を持ったまま死んでいた。「いやこんなすばらしい家族を残してなんでこんなところで死なないといかんのか」と思って、ほんとにあの時は涙が出た。ほんとにやらなくてもいい戦争を、スターリンがあのまま黙って昼間に白旗をかかげてくれば武装解除を受ける準備はできていたのに、それだけが残念だった。
- 1945(昭和20)年12月24日ごろ 船に乗せられる
- 1946(昭和21)年1月 アルチョム収容所に到着、炭鉱労働をさせられる
・死ぬ近くになるととにかく「おかあさん！」とかってとにかく寝言を言うんだ。国へ帰りたい、日本へ帰りたい一心であそこで我慢してるんだから、死ぬ時期がきたらもうとにかく「家に帰りたい」というのが言葉に出てくるんだねえ。それで隣で寝てる人が「うるさくて寝られない」とかなんとかって言うから、「いやあもう近いんだから、我慢してろ」と、「我慢して聞いてやってくれ」と、そうやって三分の一ぐらいの人が諭すんだよねえ。だけどやっぱり「うるさいこの野郎」という人もいる。騒ぐのは一日か二日で昼間はすやすや寝てる。夜になると、やっぱり国から呼ばれるんだべねえあれ。そうして衛生兵に言ったら、さっさと担架をもってきてすぐ連れていくんだ。そうして裸にして死体を外に積んでいた。
- 1947(昭和22)年4月1日 ナホトカに残される
- 1947(昭和22)年8月13日 復員

(取材日:2014年12月13日、2015年1月24日)